

第 XIX 回 IAU 総会

古 在 由 秀*

第 19 回の IAU (国際天文学連合) の総会は、1985 年 11 月 19 日から 28 日までインドのニューデリーでひらかれた。普通は IAU の総会は夏にひらかれるのであるが、前回のギリシアでの総会も暑かったということで、8 月をさけ、11 月開催となったのである。従って学期中での総会ということになり、あまり多くの出席者は期待できなかったのであるが、ほぼ 50 ケ国から 1,600 人ほどの出席者があり、このうち 300 人はインド人であった。なお、日本からの出席者はほぼ 40 人、中国からは 60 人も出席した。

インドでの総会は、インドの天文学の指導者であり、IAU の前の会長であった Bappu 氏によって提案され、実現にこぎつけたのだが、インドはまだ外貨の事情が非常に悪く、天文学者のなかでも外国に出たことのない人も多いので、この総会のインドの天文学界に与える影響は計りしれぬものがあったと思う。Bappu 氏自身は残念ながら、ギリシアの総会の直前に亡くなってしまった。

今回の総会にはインド政府も力をいれ、会場としては政府の Vigyan Bhavan という非常に立派な会議場が使え、開会式にはガンジー首相も出席し、科学についての考え方もふくめた非常に立派な話をされた。

ご承知のように、IAU には 40 の委員会があり、すべての委員会が会期中に独自で、あるいは他の委員会と合同で会議を開いたが、それぞれが 1 日がかりの 7 つの Joint Discussion ももたれた、その題目は、Reference Frames, Long-Period Eclipsing Binary Stars and Related Objects, Solar and Stellar Non-Radial Oscillations, Radio Astronomy and Cosmology, Stellar Activity: Rotation and Magnetic Fields, Evolution in Young Populations in Galaxies, Supernovae であった。

夕方、リセプション、インドダンスの会、コンサート、夕食会などがひらかれた他、Radhakrishnan による Pulsar, Sagdeev による Venus, Rubin による Dark Matter in the Universe という Invited Discourses がひらかれた。このうち Sagdeev は同時期にジュネーバでひらかれていた米ソ首脳会談に随員として参加せざるをえなくなったとのことで、Mashevitch 女史がこれを代読した。

全体会議は初日と最終日にひらかれ、とりきめなどがなされたのだが、その他、国の代表者の会議、財政委員

会、指名委員会がひらかれ、これには筆者と小平桂一氏とが分担して出席した。

先づ、今後 3 年間の会長としては、J. Sahade (アルゼンチン) がえられ、副会長としては R. P. Kraft (米国)、M. Peimbert (メキシコ)、Ya. S. Yatskiv (ソ連) が留任し、A. Batten (カナダ)、R. Kippenhahn (ドイツ連邦)、P. O. Lindblad (スウェーデン) が新任された。General Secretary には J. P. Swings (ベルギー) が、Assistant General Secretary には D. McNally (英国) が就任した。

次の会長、副会長などを決めるための Special Nominating Committee は、会長が委員長になるが、委員としては、V. K. Abalakin (ソ連)、小平桂一、G. Swarup (インド)、F. Pacini (イタリア)、B. Pagel (英国) と決った。

今回の総会でも分担金の値上げが決った。それまでの分担金の一単位は 1760 スイスフランであったが、今回からは一年ごとにインフレ率にあわせて、1886 年は 1885 フラン、1887 年は 1945 フラン、1888 年は 2005 フランとスライドさせることになった。なお、日本はカテゴリー 6 で 14 単位を払っている。同じカテゴリーに属する国はカナダであり、一つ上のカテゴリー 7 (20 単位) の国は、フランス、ドイツ連邦共和国、イギリスであり、カテゴリー 8 (30 単位) は米国である。また、財政委員会での議論で、Regional Meeting の予算が少しけずられ、その分 Exchange of Astronomers の予算が増加した。

今回の総会でも沢山の resolutions が採択されたが、このうち、総会で承認されたもの、委員会で決議して総会の endorse をうけたもの、委員会限りのものと 3 種類ある。総会で決ったもののうち、Executive Committee 提案のものは、

(i) 3 年前にできた第 51 委員会の名前を Search for Extraterrestrial Life から Bioastronomy にする。

(ii) ICSU (International Council of Scientific Unions, IAU の上部団体) の 1982 年の、“科学者への出国ビザの拒否は、科学の国際協力についての大きな障害になるので重大な関心事である” という resolution に同意し、IAU の加盟国に対し、このようなケースを速に処理するようにという趣旨のもの。

(iii) 同じく 1984 年の ICSU の resolution に同意し、すべての国の人が出席したい会議に出席できるな

* 東京天文台 Yoshihide Kozai: XIXth General Assembly of the International Astronomical Union

ど、科学者の Free Circulation の精神を徹底させること、の 3 つである。

各委員会からきてきたもので総会で承認された resolutions は 8 つで、題目だけをのせると、Responsibility of Time, Reference Frames, CCIR (International Radio Consultative Committee) Actions, Radio Frequency Transmission from Space, VLBI Coordination, Protection of Observatory Sites, Danger of Contamination of Space, Tycho's Observations の 8 つである。これらについては専門の人から必要なものの解説があるだろうし、IAU Information Bulletin に全文がのると思う。このうち、最初の 2 つは、時刻及び極運動の中央局である BIH, IPMS の廃止をとまなうものものであり、現在国際原子時 (TAI), 協定世界時 (UTC) の決定は BIH で行っているが、TAI は国際度量衡委員会 (CIPM) などの責任において BIPM (Bureau International des Poids et Mesures) が決めることになる。また BIH, IPMS を統合した新しい組織は 1988 年 1 月に発足し、ここで UTC や極運動を決め、うるう秒の導入などの決定も行うことになった。

総会で endorse した resolutions は 14 あったが、これも IAU Information Bulletin にのると思う。

今回、IAU の新しい General Members として 953 名認められたが、この数は新記録であり、全体として会員数は 6000 人をこえた。特に中国からは 200 人に近い会員が認められた。日本からは国内委員会から提案した 37 名 (天文月報, 1985 年 5 月号) の他、各委員会から提案された平田龍幸、中野圭一氏が認められた。中野氏の場合にはアマチュアということもあって委員会でも議論があったが、他の国の代表からもアマチュアとしても特に貢献の大きい人ということで推せんの演説もあり、認められた。この他、委員会の consultant として、第 20 委員会に関勉氏が認められた。

委員会関係の人事も決った。日本人としては、29 委員会 (Stellar Spectra) の寿岳潤氏、第 44 委員会 (Astronomy from Space) の小田稔氏が退任し、第 20 委員会 (Positions and Motions of Minor Planets, Comets and Satellites) で古在由秀氏、第 35 委員会 (Stellar Constitution) で杉本大一郎氏、第 36 委員会 (Theory of Stellar Atmosphere) で小平桂一氏が委員長に就任、第 8 委員会 (Position Astronomy) で宮本昌典氏、第 47 委員会 (Cosmology) で佐藤勝彦氏が副委員長に就任した。

また、ナイジェリアの IAU 加盟が決り、IAU は 50 の加盟団体 (中国には 2 つの加盟団体があるので、その実数は 51 になる) をもつこととなった。

次の 20 回総会は、アメリカ合衆国の Baltimore の Convention Center で、1988 年の 8 月にひらかれること

も決った。アメリカ天文学会の年会でも 1500 人の参加があるので、かなりの数の参加者がみこまれ、運営は大変になるであろう。次の 1991 年の総会はヨーロッパのどこかでされることになるだろうが、1994 年の総会については、天文学研究連絡委員会が日本が立候補の意志を表明してもよいのではないかということになり、この旨を General Secretary に伝えた。ところが、中国も前回の総会でその意志を IAU に伝えており、1994 年の総会の開催地については IAU の Executive Committee で検討されるだろう。

また、1984 年の京都での Asia-Pacific の IAU の会議で、次回は 1987 年にイラクのバグダッドでひらかれることが決っていたようで、今回の総会中にイラクの代表の人達との話し合いがあった。しかし、いかんせんイラクはイランと戦争中で、IAU 執行部とも相談したが、少くとも現時点でみとめるわけにはいかないことになり、1987 年の開催は事実上は見送られた。また、エジプトから、バグダッドでひらかれるなら、Africa の名前も入れてほしいという申し入れもあった。バグダッド開催が見送られた段階で、中国がその代りをしたい責任を表明したようである。

今回の IAU の総会は、参加者の数こそ多少少なめであったとはいえ、大体においては成功裡に終わったと思っている。外国からの参加者も、普通は訪れる機会のないニュー・デリーの街をみ、多くのインドの天文学者に会い、立派なタジマ・ハールなどを見ることができ、科学的な面からいっても、かなり充実したスケジュールがくまっていたという印象がある。各委員会も多く大切な問題をかかえ、今回の Baltimore では、より充実した議論が進行されるであろう。一方、IAU の総会中の新聞によれば、会場の医務室には 500 人以上の参加者が訪れ、そのなかには入院させられた人もいたというから、この面では開催地としての問題はあったといわざるを得ない。

以上報告したように、IAU のなかでの日本の天文学者の役割りは増大し、Member の数も増えてきている一方、まだ、IAU との連絡が不十分な点がある。IAU の、あるいはその委員会の Member になった人達は、それによって業務が生じたのだとも考えてもらい、委員会との連絡、あるいは必要な情報をまわりの研究者に流すということにも心がけてもらう必要がある。委員会でのアンケート、調査などで、日本の会員から答が返ってこないといった苦情もいくつかいっている。この機会にこのことを特に申しさえることにする。また、1994 年の総会の日本開催が決まれば、そのための準備も大変になることが予想されるので、この点については多くの人達の努力が必要となろう。